

長崎医療センター

座談会 Vol. 18

千燈照院

千燈照院とは…
長崎医療センター千人の職員
が力を合せて高度医療の実現
にまい進する姿勢を表す言葉。

褥瘡チーム

今回は褥瘡チームの活動についてお話を伺います。新しいタイプの褥瘡にも注意しながら、“いかに予防するか”、“いかに治療するか”、“いかに地域全体で対応していくか”。課題を明確にしたうえで、プロ集団として当センター独自の試みがなされているようです。

座談会参加者

形成外科部長	藤岡 正樹
看護師長	重富 祐子
皮膚・排泄ケア認定看護師	中村裕紀子
管理栄養士	有働 舞衣
聞き手：院長	江崎 宏典

江 崎：本日は褥瘡チームの主要メンバーに集まっていただきました。まず、褥瘡チームの概要を教えてください。

藤 岡：2004年にスタートしたチームです。院内の褥瘡の発生予防と院内外の褥瘡患者さんの適切な治療と再発予防を目的としております。

【褥瘡対策の予防】

江 崎：褥瘡の予防対策から教えてください。

中 村：当院は、入院時に患者さんの日常生活の自立度判定を行い、危険因子のある方は診療計画書をたてて予防対策を行っております。また、特にリスクの高い患者さんについては褥瘡管理者である私が病棟の看護師と一緒にケアをしながら予防しております。褥瘡がある方は全員週1回の褥瘡回診で観察しております。

江 崎：早期予防には何が必要ですか。

中 村：病棟教育です。当院では、各病棟に褥瘡リンクスタッフを配置しております。私も各病棟の褥瘡カンファレンスに参加することで、どういう患者さんがリスクが高

いのか、スタッフ全員で考える機会を作っております。

江 崎：褥瘡患者さんの状況はどのように把握されていますか？

重 富：看護部では各病棟の褥瘡保有者を毎日リストとして提出してもらっています。これを褥瘡担当の中村さんが利用して、状況を観察できる体制を整えております。

江 崎：褥瘡チームで、栄養士さんはどのような活動をされていますか。

有 働：褥瘡があり栄養状態の低い方が、食事をしっかり取れることを目標としております。栄養が取れていても傷の治りの良くない方には、創傷治療促進のために、ガイドラインで推奨されているアルギニンやコラーゲンペプチドなどが入った栄養剤を提案したりしております。

江 崎：褥瘡治療に栄養サポートは不可欠ですね。

有 働：経腸栄養の患者さんでは下痢の為に褥瘡が悪化することもあります。下痢がある方を早期に抽出して、各病棟の褥瘡リンクスタッフやNSTリンクスタッフと話しあって対策をたてていくように心がけています。

藤 岡：当院の褥瘡チームの特徴のひとつは、NST(栄養サポート)チームとの垣根が低いことです。栄養士がチームの要として橋渡しとなり、ほぼ100%褥瘡の患者さんはNSTチームと一緒に管理してくれるので、褥瘡の治りも早いです。

江 崎：寝具のとりくみはどのようにされていますか？

中 村：体圧分散マットレスを不足がないように準備しており、患者さんに状態に応じて使用しております。体位の検討も患者さん毎に対応しております。



藤岡：当院の寝具は中央管理にしています。必要な時に必要なものが用意できるように工夫をしたことで、とてもうまくいっております。

【褥瘡の治療】

江崎：治療に関して教えてください。

藤岡：一番の治療は早期発見・早期処置です。当院では皮膚が赤くなった段階で拾い上げ、対応をしているので、悪化することが少ないです。

江崎：軽症のうちに対応されているのですか。

藤岡：長時間の手術でおしりが赤くなっている段階で、褥瘡として厳しく判定していますので、発生件数としては多いのかもしれませんが。

江崎：傷のひどい方には手術という形になるのですか。

藤岡：本来きちんとケアをすれば傷は治りますが、患者さんの状況次第では手術します。しかし、当院では傷のひどい方が手術をする場合は、再発防止のため、介護等の環境をきちんと整備することを前提にしております。

重富：当院の地域医療連携係長は褥瘡の知識も豊富ですので、訪問看護等で適切な調整をしてくれます。実際、褥瘡が再発して再入院される患者さんは少ないです。

【新しい褥瘡】

江崎：昨今、新しいタイプの褥瘡が発生していると伺いましたが、どのようなものですか。



NPPVマスクの圧迫で発生した創傷

中村：医療機器の装着によってできる圧迫創傷である“医療関連機器圧迫創傷”です。

重富：例えば人工呼吸器のマスクが原因の褥瘡では、マスクを患者さんによりフィットしたタイプに変更したり、最初から皮膚に予防シールをはって、予防する等試行錯誤しております。

中村：褥瘡チームだけでは対応しきれないケースもあるため、



形成外科部長

藤岡 正樹
(ふじおか まさき)
平成26年より現職

医療安全チームやRSTチームにも協力をお願いして取り組んでおります。機器自体に外国製が多いということで、日本人に合っていないというのも一因ではないかと思っております。

江崎：メーカーに対応はお願いしているのですか。

藤岡：お願いしています。深部静脈血栓予防の弾性ストッキングでも褥瘡ができるのですが、国内のメーカーに改善を求めた結果、改良ストッキングを開発してくれました。

中村：外国製の医療機器だと対応が難しいケースもあります。医療機械の導入時にどのようなリスクがあるのかも加味した上で対応してほしいと思っております。

藤岡：“医療関連機器圧迫創傷”は“医原性”でないかと思っております。医療安全チームと一緒に対策をとっていきたいと考えております。

江崎：治療に必要な医療機器であってもどういうリスクがあるのかを皆に周知した上で、更なる予防対策が重要となりますね。

【地域での活動】

江崎：地域の中での予防対策については、どのような活動をされておりますか。

藤岡：長崎在宅褥瘡セミナーを年1回開催しております。毎回約300名にご参加いただき、大変関心が高いです。

江崎：地域全体の底上げのためにもセミナーは大事ですね。

藤岡：患者さんの傷をなんとかしてあげたいと努力されている介護者・看護師の方々のためにも定期的開催をしていきたいと思っております。

江崎：地域全体の褥瘡対策のためにもぜひよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

